

親鸞仏教センター通信

2004.
December

第12号

2004年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

わたしの〈居場所〉

親鸞仏教センター研究員 伊 東 恵 深

この春、東京での生活を始めた当初、住宅マンションの広告の多いことに驚いた。毎日大量のチラシが、新聞の折り込みや郵便受けに入っており、そのいずれもが「交通の便の良さ」や「自然との共生」など、生活環境の充実を売りものにして、購買意欲をかき立てている。いったいどれほどの需要があるのかと思っていたが、東京都の人口は、ここ8年ほどの間、毎年8～10万人の勢いで増加しているという(2004年2月24日、東京都発表)。つまり、地方都市が毎年一つ誕生している計算になる。

これまで、地方分権の促進が久しく提言されてきたが、この一極集中化の傾向は止みそうにない。その要因は多岐にわたるが、その一つとして、都市生活の利便性が挙げられるのではないか。「職住商」などの機能が一体化した生活環境は、多くの現代人を魅了している。その理由は、生計を立てるためであったり、便利で快適な暮らしのためであったりと、千差万別であるが、ともかく、自分にとってより良い居場所を都市空間のなかに見いだそうとしているのである。それは同時に、癒され安らぐことのできる心の拠りどころを、無意識のうちに探し求めているのでもあろう。

さて、このような現状を目の当たりにして、清沢満之の言葉があらためて想起されるのである。

大道を知見すれば、自己に在るものに不足を感じずることはないであろう。自己に在るものに不足を感じなければ、他に在るものを求めることはないであろう。

(「絶対他力の大道」私訳)

これは、清沢の宗教的信念を述べた一文である。「大道を知見する」とは、自分のはからいを超えた絶対無限のはたらきに託して、自らの分限を自覚することである。換言すれば、人生の拠りどころが明確になることである。それによって、いかなる状況や環境にあっても、自分に不足を感じることなく、現在に満足していくことができる、と教えられている。振り返って、われわれの生活はどうであろうか。現在の自分に満足することなく、常に理想の自分、あるいは理想の環境を、外的な条件のなかに追い求めているのではないだろうか。清沢の言葉は、その^{まなこ}の方向を転ずる視座を与えているのである。

人は時代とともに生きている。わたしも同様に、文明の利便性に浴し、現代に生活する者の一人である。そのようななかで、近代の合理性に立つ人間中心主義に流されることなく、現代が抱える闇といかに向き合っていけるか。いたずらに批判したり忌避したりするのではなく、そこに噴出する矛盾と苦悩とをしっかりと見据えていくことが求められている。まさに、わたしの〈居場所〉が問われているのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 わが身を引き受ける本当の自信

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第29回から第31回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第29回は天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、われわれが感ずる意識のレベルを超えることと「座功德」の問題について、第30回は「身業功德」について、第31回は「口業功德」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第28回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 「我」の意味——有限なる身の自覚

この間、この集まり（連続講座「親鸞思想の解明」）にもよく来てくださった、東京大学で倫理学の教授をしておられる竹内整一先生とお会いして、お話ししておりましたら、大変な疑問を出してくださったのです。それは、仏教は「無我」、「諸法無我」と言う。これは根本テーゼ（These）であるのに、清沢満之は「我」と言う、と。その我が残っているのはどうしてですか、とおっしゃられた。これは非常に大事な問題なのです。

確かに清沢満之は、「我他力の救済を念するときは、我が処する所に光明照し、我他力の救済を忘るゝときは、我が処する所に黒闇覆ふ」（「他力の救済」自筆原稿）というように、「我」、「我」と繰り返すわけです。これは清沢満之だけの問題ではない。親鸞が、『歎異抄』で「親鸞一人がためなりけり」というように、親鸞、親鸞と名を告げていますし、さらには、『浄土論』でも、偈文で「我」が繰り返し出てきます。「世尊我一心」と、そこから始まって、

「故我願生彼阿弥陀仏国」、我が願生する。曇鸞大師は、それは単なる文法上で「我」と言っているだけで、重い意味で自我を主張しているわけではないというように理解しています。けれども、それだけではない大事な問題ではないか、と私はかねてから思っていたので、竹内先生の疑問をいただいて、はっと思い当たるところがありました。それは、浄土の教えというものと、それに出遇う自分というものの、その教えの成り立ちです。

「諸法無我」というのは、存在の真理であるし、お釈迦さまが教えられた自己認識でもあるのでしょうか。真理として、我はない。われわれは執着してやまないけれども、実体は何も無いのだと。永遠にあるものなど何も無いというのが「無我」です。

しかし、教えられても教えられても、真理に立つことができないというのが、この愚かな人間である。だから、親鸞という人は、この浄土の教えは、言うならば、他の道から落ちこぼれた人間、あるいは、他の道では自分を成就できないという自覚ができた人間が出遇う教えだ、というふうに押さえたわけです。これが、「我」という立場をなくさない浄土の教えというものをいただく、大事な一点だろうと思うのです。

その「我」の内容は、立派な我ではなくて、有限なる身をもった我です。善導大師が、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」（『真宗聖典』215頁 東本願寺出版部）という、そういう内容を孕んだ「我」なのです。仏教の意欲、菩提心の要求を、「出離生

死」という言葉で言い当てるわけですが、それは、人間の生きてあること自身が迷いであり、その迷っているいのちから目覚めたいという要求です。こういう要求を、自分自身の要求として生きようという関心をどこかで感じないと、仏教の教えは聞こえないのです。これを感じたうえでの話になるわけですが、善導大師が「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」と言ったときには、出離の縁がない。出離の可能性を呼びかけている仏教一般の教えに出遇いながら、迷いのいのちを離れて無限なる世界へと超え出ることができない。そういう悲しみの身の自覚です。そのときに、この往生浄土の道を選び取れということが、一つの方法論になるわけです。

■ 本当の自信

有限から無限にはとどかない。けれども、その有限と無限の関係をわたそうとして、われわれからはいけないけれども、向こうから来てくださっている。無限の側に包み込みたい、衆生をたすけたいという願いの側から、教えが出ている。その願いの前に立った我が、願いとぶつかる、そこに「我」という名告りがある。迷っているいのちのただ中に、如来からはたらきを、いま感じ取ったら、いまここにたすかっていく。けれども、たすかり終わって、向こう側にいくのではない。そこに「我」という字が、必ず付くわけです。無我になってしまうというような、抽象的なことにならない。

この「我」は、たすからない我、煩惱の我。けれども、そこにたすかっていると。「我他力の救済を念するとき」、もうすでに、ここに光が来ていると言い得る。言い得るけれども、忘れるとき、やっぱりたすからない黒闇の身だと。だからまた念ずる。念ずればまた光があると。それでは、ただウロウロしているだけではないかと言われるかもしれませんが、そうではない。事実、迷いを生きているのだけれども、如来の願いがいつもはたらきかけてきていることを感ずれば、ここにもう救いが来ている。

曾我量深先生がよく言っておられました。「機の深信」は絶望ではない。「自身は現にこ

れ罪惡生死の凡夫」と本当にうなずくということは、「ああ、もうだめだ」という、自暴自棄のようなものではないと。それは、絶望ではなくて、そういうたすからない身であるということ、を、本当にありがたい身として引き受けられるのだと。

「機の深信」を、親鸞という人は「深信自身」(『愚禿鈔』『真宗聖典』440頁)、自らが自分自身を深く信ずるというふううなずかれた。自分を信ずるというと、普通は、「能力があると信ずる」とか、「少しは、ましだと信ずる」とか、そんなふううなずに信じようとする。けれども、それは所詮、有限です。人と比較して「ちょっとはましだ」と信ずるのは煩惱です。比較心がついているから、自分よりもっと大きいものにうなずかると、がっかりして絶望する。揺れ動いているだけで、自信にはならない。

本当の自信、本当に自分自身が、「これでよい」と言うのには、もっと深い自覚がなければならない。機の深信は、決して絶望ではなくて、本当の自信なのだ。いくら反省しても、反省の下から煩惱が出てくる、そういう愚かな身である。けれども、本願の呼びかけをここに感ずる。煩惱の身であるからこそ、ここに感ずると。そのように、無限なるはたらきが、自分の前に本当に与えられてあるということに立つとき、初めて愚かなこの身が引き受けられ、本当に自分が信じられるのです。

(文責：親鸞仏教センター)

※本講座の詳細は、『現代と親鸞』に掲載しています。FAX・ハガキ・E-mailのいずれかで、同センターまでお申し込みください。

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2004年12月 6日(月)午後6時30分～9時

2005年 1月14日(金) 同上

2月14日(月) 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

この名字をとえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからのほからいまじわらざるがゆえに、本願に相應して、実報土に往生するなり。

これは誓願の不思議を、むねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらなることなきなり。

つぎにみずからのほからいをさしはさみて、善惡のふたつにつきて、往生のたすけ・さわり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがところに往生の業をあげみて、もうすところの念仏をも自行になすなり。このひとは、名号の不思議をも、また信ぜざるなり。

信ぜざれども、^③辺地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これすなわち、誓願不思議のゆえなれば、ただひとつなるべし。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

たく人間の努力意識が混ざらないのである。よって本願のおこころとひとつになって、阿弥陀如来の真実の世界に生まれることができるのである。

これはつまり、思慮を超えた本願のはたらきを、もつとも肝要だところの底から受け止めたならば、すでに南無阿弥陀仏の不思議も備わっているのだから、誓願と名号の不思議はひとつであり、まったく異なることはないのである。

次に、自分自身の思慮・分別をさしはさんで、善惡の行為について、これは往生のためのたすけとなる善い行為、これは往生のために妨げとなる悪い行為と、ふたつに分けて考えるのは、思慮を超えた本願のはたらきにすべてをまかせないで、自分のところで往生のための善行をばげみ、南無阿弥陀仏を称えることも自己満足のための行為にしようことである。このひとは、阿弥陀の名号の思慮・分別を超えたはたらきをも、また信じていないのである。

しかし、たとえ信じていなくとも、方便化土(仮りの救い)に摂めとって、真実の浄土に必ず生まれさえずにはおかないという願いによって、究極的に真実の浄土に往けるのは、阿弥陀の名号の不思議な力のはたらきなのである。これは、そのまま思慮を超えた阿弥陀の本願の不思議なはたらきであるから、誓願と名号とはまったくひとつなのである。

語 註

①「一文不通」表面上の意味は、「文字ひとつ知らない」という意味であるが、親鸞が「愚」と自己表現するように、学問や知識を超えた真実に帰っていくという意味をも含んでいる。

②「生死」サンスクリット語・サンサーラの訳語。仏教がとらえた迷妄的な人間のあり方。「流転・輪廻」と同義語。

③「辺地懈慢疑城胎宮」方便化土の別名。浄土の救いにあふながら、それを自分が努力して得たと思う意識の閉鎖性を批判するための象徴的表現。辺地(広大無辺際)の浄土のなかにありつつも、閉じこもろうとする意識・懈慢(自分の得た宗教的境界に腰をおろす意識)・疑城(浄土にありながら、仏智不思議を疑う意識)・胎宮(母胎のなかで、ぬくぬくと目覚めようとしないうなあり方)

(訳・語註・親鸞仏教センター)

『anjalī』第8号および

『現代と親鸞』第7号を刊行

『anjalī』第8号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第7号(写真下)を刊行しました。『anjalī』第8号では、文化人類学者の辻信一氏、埼玉大学名誉教授の暉峻淑子氏、元東京都立衛生研究所の五十嵐英夫氏、神経内科医の平山恵造氏、静岡県立大学名誉教授の味村登氏、大谷大学名誉教授の廣瀬果氏、作家の青木新門氏、臨床心理士の諸富祥彦氏、仏教学者の斎藤明氏など、十名の各専門分野の方々に、現代の諸課題についてご執筆いただいています。

『現代と親鸞』第7号では、研究論文のほか、「現代と親鸞の研究会」からジャーナリストの筑紫哲也氏、大阪大学教授の鷲田清一氏、「現代における人間像に学ぶ研究会」から精神科医の高岡健氏、「英訳「教行信証」研究会」から元大谷大学教授の坂東性純氏の講義と質疑。また「親鸞思想の解明」では、シンポジウムから物理学者の國府田隆夫氏の講演、仏教学者の下田正弘氏と本多所長の提言。さらに、本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

『歎異抄』の意味世界へ入っていくようにすると、逆にこちら側が照り返されてくる。それは「逆照作用」といってもよい。例えば、「誓願不思議・名号不思議」という言葉に出あうと、「不思議」が『歎異抄』の側に属しているように思えてしまう。しかし、その「不思議」は、「すでに、汝の存在にはたらいっているのではないか？」と逆照されてくる。

ひととして誕生することの不思議、国籍・民族・時代・性別などの限定性、自己の存在の原初に「不思議」があるではないかと。「不思議」という言葉を忌避させるのは、理性である。理性は、認識・分析・統合という作用により、「不思議」を排除しようとする。その理性そのものが、『歎異抄』から逆照されてくるのである。そこに初めて、「不思議」を拝跪し、受容する理性が成り立つように思える。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十一條〉

原文

①「一文不通のともがらの念仏もうすにおうて、」なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」と、いいおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいいひらかずして、ひとのころをまどわすこと、この条、かえすがえすもこのころをとどめて、おもいわくべきことなり。

誓願の不思議によりて、たもちやすくとなえやすき名号を案じいだしたまいて、

現代語訳

学問・知識によらないで、ひたすら念仏を称えているひとたちに対して、「お前は、人間の思慮を超えた阿弥陀の本願を信じて念仏をしているのか？ それとも、阿弥陀の名号（南無阿弥陀仏）の不思議なはたらきを信じて念仏しているのか？」と、相手をびつくりさせるような議論を吹っかけて、ふたつの不思議の本当の意味をはっきりと説くこともしないで、人びとのころを惑わせるようなことは、くれぐれも熟慮し、注意して慎まねばならない。

阿弥陀仏は、思慮を超えた本願のはたらきによって、いつでも思い起こすことができ、だれでも称えることのできる名号として、自らを現象世界へ表現し、この名号を称えるものを、浄土に迎えようと約束されていることである。そうであるから、まず阿弥陀仏の大悲のはたらきに無条件に包まれて、迷いの生活をひるがえすことができると信じて、南無阿弥陀仏と称えられるのも、阿弥陀如来の尊いはたらきだと領けば、まっ

親鸞仏教センターの動き

（2004・9・11）

■2004年

- 9・1 人事発令（常規聴取研究員が再任）
『現代と親鸞』第6号（清沢満之特集号）、「親鸞仏教センター通信」第11号を発行。
- 9・2 第50回英訳「教行信証」研究会。以降、5回の研究会を開催。
- 9・10 親鸞聖人ご命日のつどい
第19回研究会議（研究・交流・出版等の具体化に向けた協議と実行企画）
第2回「宗教哲学散骨」輪談会
第30回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
第24回清沢満之研究会。以降、2回の研究会を開催。
- 9・27 第49回聖典の試訳「歎異抄」研究会。以降、4回の研究会を開催。
- 10・1 新田智通氏（元嘱託研究員、元東京大学大学院）が東方仏教徒協会（EBS）（大谷大学内）の業務に就く。
- 10・4 現代における人間像に学ぶ研究会③「いのちと現代医療」ひまわりクリニック院長・森津純子氏（文京区・ひまわりクリニック）
- 10・8 親鸞聖人ご命日のつどい
第31回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
第3回「親鸞思想の解明懇談会」
第2回親鸞思想の解明シンポジウム千代田区・東京国際フォーラム講演・「科学技術文明と現代の不安」知によって覆い隠された世界と宗教」下田正弘氏（東京大学大学院助教授、パネリスト）
菅原伸郎氏（元朝日新聞学芸部記者、本多弘之所長）
藤原正寿氏（元研究員）が教学研究研究所研究員に就任。
- 11・10 親鸞聖人ご命日のつどい
『聖典』第8号、「現代と親鸞」第7号、「親鸞仏教センター通信」第12号を発行。
- 11・12

現代と親鸞の研究会・第13回

いま、生きる力を問う

大阪大学教授 鷲田 清 一



鷲田清一 氏

2004年1月26日、東京ガーデンパレス（文京区）において、大阪大学教授の鷲田清一氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

臨床哲学を提唱し、医療、介護、教育、企業などの現場で起こっている問題に関わりながら、対話としての哲学の確立をめざす鷲田氏に、「いま、生きる力を問う」をテーマに語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ あらゆる人を「一」と数える近代社会

「生きる力」というとき、おそらく「存在の意味」という問題と切り離しては考えられないだろうと思います。

近代社会では、どうして自分の存在の意味を必要とするのかと言えば、要するに、個人の生き方という視点から、「スタートラインはいっしょにしよう」ということなのです。性別や家柄、階級や貧富などを全部消去して、この国に所属している人は、すべて同じ「一」としての権利をもち、あらゆる人が同じスタートラインに立てるという理念で、近代社会は再出発しました。現実には、いまだに皆をきちんと一として数えていない問題もありますが、理念としてはそれをめざしてきました。つまり、職業にしろ、結婚にしろ、すべて自分で決めていかなければならず、また、自己決定の結果として責任が問われるという社会になっているのです。

そうすると、当然「自分とは何だろう」「自

分には何が向いているのだろうか」となどと、嫌でも自分探しをせざるを得なくなります。

しかしながら、あらゆることが分業化され、専門化されて巨大な都市システムのなかにはめ込まれていった結果、私たちは「存在の意味」を見いだし難くなっていることも事実です。何でも資格というものが問われる専門化社会になってしまいました。つまり、小さいときから「自分が本当に資格を満たしているのか」、言い換えると、「本当にここにいるに値するものであるのかどうか」という問いを、恒常的に自分に向けざるを得ないような精神生活を送らなければならないということです。それで、「自分探し」が始まるのですが、他の人にないものを自分のなかを探すという自分探しは、「タイプ探し」であり「類型探し」なので、本当の意味での自分探しにはつながりません。

一方で、他者による無条件の肯定を求めるのですが、それがまさに「恋愛」です。恋愛は、無条件の肯定であり、他者の意識の宛先となることです。しかし、無条件の肯定は、理念としてはあまりにも強すぎて、むしろ現実には破綻の原因になりやすいものです。絶えず誰かとつながっていたいという気持ちが強ければ強いほど、すぐく依存的な生き方になってしまう傾向もあります。つまり、自分探しも恋愛もどちらにいてももうまくいかないことを、皆が必死にやっているように私には見えます。

■ 他者の意識の宛先になる

ここで、他者の意識の宛先になるということをもっと広いイメージで考えてみましょう。

例えば、看護の現場で言えば、「患者本位」ということで、何かをしてあげることばかり考えて、一方通行の関係のままだと、絶対もたなくなるわけです。大切なのは、「ケアされる人が、ケアする人をケアする」ということではないかと思っています。

一例ですが、ケアということを考えるときに、私自身が実際に経験した、新人の女性の看護師さんと、ほぼ寝たきり状態の80歳代の患者のおじいさんのことが思い浮かびます。

それは、私の入院中の出来事です。昼食後のひととき、決まってその患者のおじいさんの蒲団に覆いかぶさり、もたれて、「お昼寝」をする看護師さんと、病院側に見つからないように、病室から廊下を見張りするおじいさんの話です。疲れて眠たい看護師さんは、本来は患者さんをケアしてあげる立場なのに、ケアされる患者さんのほうが看護師さんのことを心配して、見張りをしているわけです。

ところが、この出来事をとおして、おじいさんは、この若い看護師さんに二つの生きる力をもらったのです。一つは、これまで人にもたれることはあっても、人からもたれられる経験がここの数十年なかったおじいさんが、もたれられるという新鮮な感覚をもてたこと、それからもう一つ、「私が廊下を監視していないと、この看護師さんは必ずだめになる」と感じたこと、この二つのことから、おじいさんは自分が他人を支えているという感情も、久しぶりにもてたのでしょう。

自分の存在が、他人にとって意味があると感じられたときに、人は力が湧いてくる。このおじいさんは、自分が彼女にとって不可欠の存在である、と感じられたのでしょう。つまり、「ケアする」と「される」の関係が逆転しています。その行為を通じて、おじいさんは看護師さんから生きる力をもらっているわけです。ケアということを考える場合も、一方的な関係だけではなく、ケアしてあげる人が逆にケアされるというような反転が絶えず起こるのだということです。

自分が他者の意識の宛先になるということは、言い換えると、自分が相手に関心をもつということです。他人に関心をもち過ぎるとおせっかいになって、今度はうっとうしくなったりしますが、しかし他人への関心を失うと、やはり生きる力を失うだろうと思います。

そういう意味では、「すべきことをどれだけしたか」ということだけで自分たちの仕事を評価するのではなく、「してはいけないことでもやったほうがいい」場合もあるし、「何もしていないでいるということが意味をもつ」場合だっているのでしょうか。看護師さんが患者さんに愚痴を言ってケアしてもらう場合もあるし、愚痴を聞く患者さんが、また自分自身をケアするというような、何重もの反転が起こると考えていくと、自分探しの泥沼に入ることもないと思います。

そのあたりまで引き返して考えると、少し気が楽になって、ガチガチではない、支え合いというイメージができるのではないのでしょうか、そんなふうに思っています。

(文責：親鸞仏教センター)

鷺田 清一(わしだ きよかず) 大阪大学教授

1949年、京都市生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。大阪大学大学院文学研究科教授。2004年より大阪大学理事・副学長。専攻は哲学、倫理学。著書に『「弱さ」のちから—ホスピタブルな光景』(講談社)、『時代のきしみ—「わたし」と国家のあいだ』(TBSブリタニカ)、『「聴く」ことの力—臨床哲学試論』(阪急コミュニケーションズ)、『死なないでいる理由』(小学館)など多数。また、『現代と親鸞』第7号に「いま、生きる力を問う」、「アンジャリ」第5号に「ケアの専門家?」(共に親鸞仏教センター)を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」(文京区の「東京ガーデンパレス」で)

2005年4月1日から発足!!

「アンジャリの会」(『aṅjali』個人購読)入会のご案内

親鸞仏教センターでは、設立4周年を機に2005年4月1日、「アンジャリの会」を発足します。この会は、親鸞仏教に親しみ、共に学んでいこうとする人たちの会です。

「アンジャリ (aṅjali)」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味します。『aṅjali』と名づけた当センター発行の情報誌は、人それぞれに思想・組織・世界・時代を生きるものが、お互いをつなぐ意味を問い直し、そして「合掌」し合えるような新たな「出会い」の場として刊行されたものです。

ご入会いただいた方には、情報誌『aṅjali』(年2回発行)と機関紙『親鸞仏教センター通信』(年4回発行)をお送りします。ご購入をとおして、一人でも多くの方に親鸞の教えにふれていただきたいと願っています。入会者には、年会費が必要となります。皆さまからのご入会を心よりお待ちしております。また、親類、友人、ご門徒の方々などにも、どうぞお勧めください。

「アンジャリの会」入会にあたって

年会費 1,000円 随時、受け付けをいたします。

①『aṅjali』(年2回発行)、『親鸞仏教センター通信』(年4回発行)の個人発送

②公開講座などのご案内

申し込み先と問い合わせ

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7 親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

清沢満之特集(『現代と親鸞』第6号)



第6号 2004年9月1日発行

研究論文

本多 弘之(所長)

「親鸞教学の法印—満之の信仰課題の展開—」

田村 晃徳(大谷大学講師、元研究員)

「霊存としての自己—吾人の価値は如何—」

藤原 正寿(教学研究所研究員、元研究員)

「内観の仏道—精神主義の現代的意義—」

清沢満之研究会

今村 仁司氏(東京経済大学教授)

「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義」

寺川 俊昭氏(大谷大学名誉教授)

「道徳心と宗教的信念—清沢における哲学と宗教—」

藤田 正勝氏(京都大学大学院教授)

「日本における西洋哲学の受容—清沢満之と大西祝—」

鼎 談

「信仰と理性—清沢満之は現代に何を語り得るか—」

今村 仁司氏、竹内 整一氏(東京大学大学院教授)

本多 弘之、田村 晃徳(司会)

ご希望の方は、FAX・ハガキ・Eメールのいずれかでお申し込みください。

送料込みで1冊1,200円です。お申し込みの後、本が届き次第、同封の振替用紙でご送金ください。振込手数料をご負担願います。なお、創刊号～第5号までのバックナンバーもあります。

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 親鸞からあなたへのメッセージ —

あ と が き

国の『社会生活統計指標—都道府県の指標—2004』(総務省統計局)によると、日本の大学(国・公・私立)の数は2002年で686校、うち首都四都県(埼玉・千葉・東京・神奈川)で188校、東京都では116校にのぼる。これは、全国の大学の約27%が首都四都県に、またそのうち約62%が東京都に集中していることになる。さらに大学の学生数を見ると、全国で2,499,147人、うち首都四都県では1,015,643人、東京都では600,777人となっている。すなわち、日本の大学生の約41%が首都四都県に、またそのうちの約60%が東京都内に就学していることになる。あくまでこの数字は、全国の大学あるいは大学生の統計データであるが、そこには、単に量的な意味合いだけではなく、これからの親鸞仏教センター活動に、一つの大きな示唆を与えてくれる課題を内包しているように思われる。それは、この数の中に、真宗大谷派寺院の出身者や真宗門徒の家庭からの学生が多く含まれているということである▼振り返ってみると、宗門はここ首都・東京に、真宗大学(1901～1911)以来、数回の学事施設の設置は試みたものの、その後、残念

ながら大学としての「人」の養成の場を持つことができないまま、今日に至っているわけである。この現状を憂えるとき、首都圏で、時代の風に直接ふれながら、大学に就学している真宗大谷派寺院の出身者や真宗門徒の学生が、親鸞仏教をとおして、何らかのかたちで互いに教えを聞くことのできる窓口を開くことが大事でないか。親鸞仏教センターがこの3年間の活動をとおしてできることと言えば、例えば、①本紙に紹介の連続講座「親鸞思想の解明」への参加呼びかけ ②若者(学生)の入信問題で揺れるカルト問題(新々宗教等が名称を変えて、大学内でサークル活動が盛んに行われている)の予防等に寄与すること ③各大学での専攻分野を超えて、親鸞仏教研究や交流会等の開催協力などであろうか▼このような願いのもとに、一つの具体的な活動(例えば、『歎異抄』に聞くついで)をとおして、首都圏在住の真宗大谷派関係の学生が、自由につづることのできる出会いの場の開かれることが望まれる。どうか、一人でも多くの方々をご紹介いただきたい。(長谷岡)